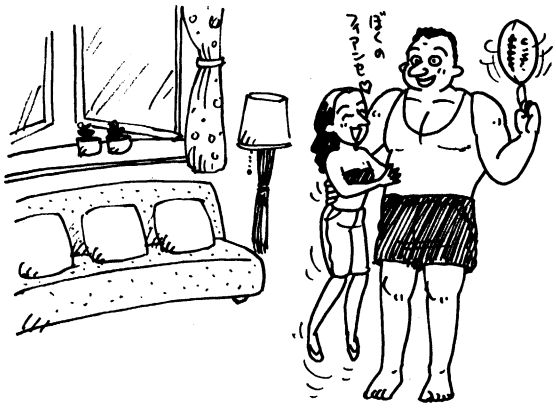
異文化と心通わせ

つくば通信 ㊼

村田　佳子



フラットシェア

～あるアスリートの日常から～

先日、陸上競技ハンマー投げの室伏広治選手が博士号を取得したり、ハードルの為末大選手が著書を出版したりして話題になりました。アスリートの競技以外の日常や現役を引退した後の進路、またその道を極めた人たちの感性、経験から発せられる言葉に興味があります。そんなニュースを見て思い出したことがありました。

オーストラリアで学校に通った10年以上前、初めはホームステイをしていたのですが、学校から遠かったこともあり家探しをしたときのことです。今では日本でも、使っていない部屋を貸し借りしたり、2人以上で家を借りたりするフラットシェアは都心を中心に普及しているようですが、私にとっては初めてのことでした。フラットとは、イギリスやオーストラリアでは日本のアパートやマンションを意味します。私の場合は、留学の一定期間住むためだったのでマンションの空き部屋を貸してくれる人を探しました。新聞や大学構内の張り紙を見て十数件電話し、やっと見つけた先はその地域でも大きめのフラットでした。

学校までは歩いて10分ほどでビーチも目の前にありました。面談のためうかがうと、広くて明るいリビングから大男が短パン・はだしで出迎えてくれました。センスのいい家具や掃除が行き届いたダイニングキッチン、2つある寝室を見せてくれました。婚約者と暮らす彼は空いている寝室のひとつを週80豪ドルで貸し、後は食器や電化製品などは自由に使っていいという契約を提示してくれました。

知らない人と同じ家に住むというのは日本では珍しいことかもしれませんが、このような海外のフラットシェアは当時オーストラリアではよくあることでした。セキュリティーのしっかりしたマンションで、プライバシーに関してはお互いルールを決めて割りきっていたので私にとってはかえって安心でした。

住み始めてから知ったのですが、彼はプロラグビーリーグの主力選手だったのです。そのころ新聞は物件欄しか見ていなかったので、連日彼の移籍問題などが報道されていることを私は全然知りませんでした。家ではくまのプーさんのように穏やかで、コロコロクリーナーでカーペットも丁寧にお掃除する彼の様子しか知らなかったので、野獣のようにボールを抱えて走る姿を新聞で見ても、同じ人とは全然思えませんでした。

そしてこの彼は、プロラグビーリーグでプレーしながら、当時20歳代後半、将来はスポーツの教育に携わることを目標に大学に通い始めました。オーストラリアでは働きながら長い時間かけて大学を卒業する人、大人になって学び直す人、さまざまでした。マルチカルチャーと言われるだけあって、移民が多かったことも多様な選択肢があることと関係があるのでしょう。その時、「学ぶことはいつ始めてもいい」と教えてもらいました。

この彼の場合は、自分の夢をじっくり考え周囲のアドバイスも参考にした上で入学を決めたようでした。試合や練習の合間や夜間、短い時間で食事を済ませた後「食器は後で洗うから、そのままにしといて。じゃ！」と慌しく学校へ出かけていったことを覚えています。

彼の場合は学校に通うという大きな変化をもって将来に備えていましたが、そうではなくとも現役中になんらかの形で将来の準備をすることは、そこで出会うスポーツ以外の人達とのかかわりも含め、たまにくじけたり、不安にもなったりする選手生活においても気分を変えられる有意義な時間になるように思いました。

（鶴岡市出身、JICA筑波国際センター・クリニックコーディネーター）